

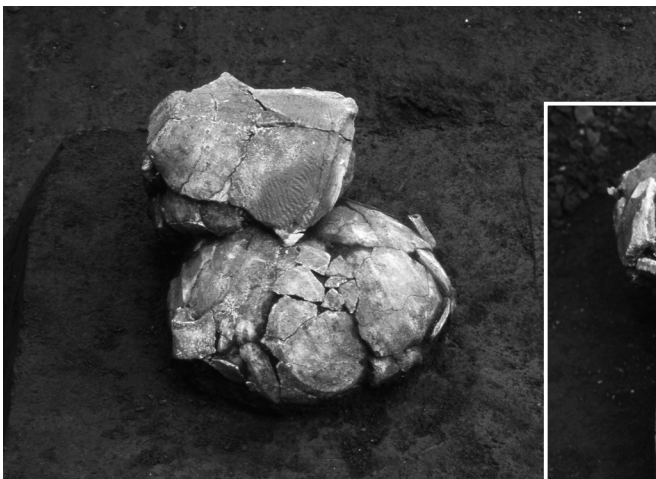
ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2023年9月20日

No.145



土器のかけらで蓋がされた状態でみつかった（左）。土器のなかには石斧が重ねてしまわれていた（右）。

もくじ

- 1-2 どんなもんだい？ 縄文時代
その2…なぜ埋めた？ ひょうたん形の土器と斧
- 3 最近の発掘調査
高安寺の八ヶ下の物語①
- 4-5 NOTE
暗さを求めるくらやみ祭
- 6 展示会案内
出張展 昆虫魅ようぜ！
- 7 series みち～道・路・通～
②黒曜石がやってきたみち
- 8 近代プラネタリウム誕生 100周年！
プラネタリウムについて知ろう！
②ケイロンⅢ・ハイブリッドは府中っ子！

どんなもんだい？ 縄文時代

じょうもん
縄文時代は、今からおよそ 16,000 年前～2,300 年前。調査・研究で明らかになっている当時のくらしとは、いかなるものでしょうか。そして、そこからどのような時代像が描けるのでしょうか。府中市内でみつかった資料を入口に、その調査・研究の一端を 4 回シリーズでご紹介します。

その2…なぜ埋めた？ ひょうたん形の土器と斧

1993 年（平成 5）に府中市武蔵台遺跡で、ひょうたん形の土器が姿を現しました。土を取り除きながら土器を調べていくと、なかには 6 点の磨製石斧が！わざわざ土器のかけらで蓋をして、地中に埋められていた土器と斧。縄文時代中期の終わり（およそ 4,400 年前）の人びとの行動に迫ってみましょう。

どんなもんだい？ 縄文時代

その2…なぜ埋めた？

ひょうたん形の土器と斧

1993年（平成5）、武蔵台遺跡の調査でこの土器は姿を現しました。下に堆積していた土ごと遺跡から搬出され、その後の整理作業で土器のなかに6点の磨製石斧の存在が確認されたのです。

土器が地中でやや起き上がった状態になっていたこと、かつ4,400年前のものにしては良好な状態でみつかったことから、捨てられたのではなく、意図的に埋められたと考えられています。

高さおよそ27cmのひょうたん形の土器は、器面が非常に薄くつくられています。紐を通せる輪状の突起、注ぎ口がついており、本来は液体を小分けにする用途を持ちました（注口土器という種類）。お酒を入れて特別な時に用いたのではないともいわれる形の土器です。今回の武蔵台遺跡の土器が、本来の用途を終えてから斧をしまうために再利用されたのか、それとも斧をしまうためにわざわざ作られたのかははっきりしません。

磨製石斧は、石を割ったり打撃したりして形を整え、砥石で磨き、先端に刃をつくりだしたものです。木製の柄に装着し、木の伐採や加工に使われました。実際に、この6点の石斧にも使われた痕跡があります。縄文時代において、樹木の利用は暮らしを支える活動のひとつであり、したがって石斧は生活必需品だったといわれています。一方、材料がある程度限られることなどから、いつでも手に入るものではなかったようです。

さて、現時点でわかっている調査成果の情報を整理した結果が右の図です。斧をしまった土器が埋められていた場所は、谷の最奥部。同時期の住居跡がそばでみつかっておらず、人びとの居住地から少し離れた地点が選ばれたと指摘されています。ちなみに、この谷をはさんで西側は武蔵台遺跡、東側が武蔵台東遺跡とよばれています。ひょうたん形の注口土器は、武蔵台遺跡のほかの調査区や、武蔵



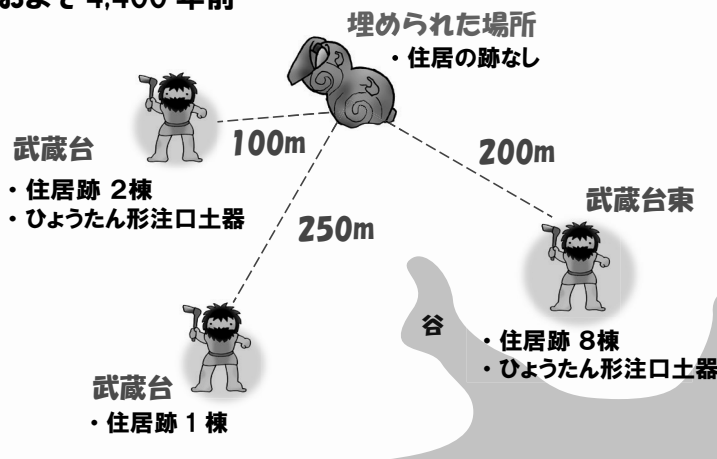
ひょうたん形の土器、土器のかけらの蓋、6点の石斧
一番大きい石斧は長さおよそ15.5cm

台東遺跡からも1点ずつ出土しており、石斧をしまった土器と近い時期のものようです。オーソドックスではないひょうたん形注口土器が近い距離で3点もみつかることには、何か意味があるのではないかと注目しています。

現時点では、武蔵台と武蔵台東それぞれに向かう道の分岐点に、一時的に斧が埋め隠された結果が本例だと考えています。また、斧の重なり方が整っており、埋められたあとに斧が取り出されることはなかったとも推測しています。

上記の考えによれば、また使うことを想定して埋めたはずなのに、忘れられたまま4,400年過ぎたことになるわけです。実は、縄文土器に磨製石斧をしまった事例は日本列島で20例弱あります。今これらの詳細を述べることはかないませんが、武蔵台と共通した意識があったのか気になるところです。（石澤茉衣子）

およそ4,400年前



「埋められたひょうたん形土器と斧」をとりまく調査成果概念図

高安寺のハケ下の物語①

片町二丁目 府中市ふるさと文化財課 佐藤 梨花



高安寺南東で見つかった区画溝

高安寺は、片町2丁目にあるお寺です。南北朝から室町時代の動乱期には鎌倉公方の陣所として用いられており、府中の歴史上、重要なお寺です。この高安寺は、足利尊氏によって再建されたとの伝承があり、「高いところに安ずる」という名前から、昔は低地部にあったとの説もあります。

さて、最近、この高安寺の南側のハケ下にて調査が行われています。今回は、その中でも、2022年（令和4）の春ごろに「税務署角」の交差点付近で発見した溝についてお伝えします。

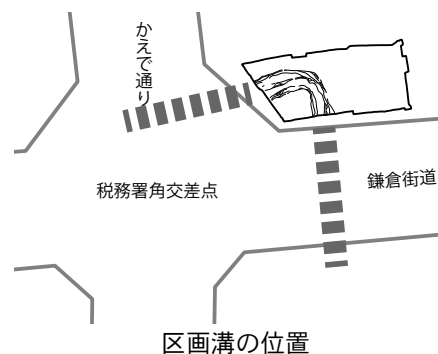
溝は、鎌倉時代の遺構や遺物のある層の下から発見されました。溝からは平安時代を中心とした年代の土器片が出土しており、平安時代から鎌倉時代初頭のどこかの時期のものともみられます。

規模は幅約3m、深さ約0.5mです。調査区内でほぼ直角に曲がっていて、東側及び南側に伸びます。平面形は方形になると見られ、調査区の南西の空間を区画する溝の可能性がります。これと類似する区画溝は、本町2丁目で見発見されていて、平安時代の国司館を囲むものとされています。今回発見した溝も、重要施設の区画溝に匹敵する規模があり、ここに何らかの重要な空間があったのではと考えています。

この溝を発掘した時、調査従事者間では、藤原秀郷の居館跡か?!と盛り上がりました。藤原秀郷は平将門の乱（935年）を鎮め、乱後に武蔵国の長官（守）に任命された人物で、高安寺は秀郷の居館跡に建てられた市川山見性寺を前身とするという伝承があるのです。調査地は高安寺の南西約300mの低地にあり、区画された空間があるということで、もしかしたら!となったのですね。

実際にここに秀郷の館があったのかは、もちろん分かりません。見性寺という寺名は中世の文書などには見えず、江戸時代の書物でしか確認できないことから、秀郷の居館跡→見性寺→高安寺という伝承が実態を表しているのかは不透明なのです。

それでもここに大きな区画溝があることは事実ですので、何らかの重要な施設があったと考えられます。どのような空間があったのか、その謎が解明されることに期待しましょう。





2023年5月5日18:30頃、神輿渡御がはじまった様子。徐々に暗くなっていくなか、8基の神輿が順番に御旅所に向けて出発した。

▼ 武蔵府中くらやみ祭

くらやみ祭は、現在毎年4月30日から5月6日まで、約1週間かけて行われる大國魂神社の例大祭です。長い歴史を伝えているだけでなく、神事のほかにさまざまな行事が複合された、大規模なものとなっています。

2023年（令和5）、コロナ禍の自粛が緩和され、4年ぶりにくらやみ祭関連行事が復活しました。コロナ対策により規模を縮小した行事もありましたが、神輿を先導する大太鼓や、祭を彩る府中囃子の音も町中に鳴り響き、万灯大会、子供神輿渡御などの行事も盛り上がりを見せ、期間中に約80万人が見物に訪れたといえます。

この祭のクライマックスは、なんとといっても5月5日の18:00から行われる神輿渡御（おいで）です。大太鼓に先導された8基の神輿が境内から御旅所まで渡御する姿が勇壮です。

かつては真夜中に明かりを消した中で神輿渡御が行われていました。しかし、実際に暗やみで行うのは危険、風紀を乱すとされ、それを理由に1960年（昭和35）には神輿渡御が中止になりました。その対策が講じられ、翌年には16:30

より、翌々年以降は16:00より渡御が開始されるようになりました。しかし、2002年（平成13）に簡略化した神事を古式に戻すなどスケジュールの見直しが行われ、18:00からの開始と改められ、現在に至っています。

なお、それまで例大祭と呼ばれることが多かったこの祭は、神輿渡御が真夜中に行われていたことにちなみ「くらやみ祭」と呼ばれるようになりました。しかしながら、暗やみとは言い難い、夕方ごろの時刻から渡御がはじまる形が60年以上続いているのです。

▼ もし旧暦でくらやみ祭を行っていたら…

ところで、日本は1872年（明治5）に西洋にあわせて新暦を導入し、それまで使用していた暦は旧暦となりました。その結果、くらやみ祭のありかたも若干変化しました。

今回神輿渡御が行われた新暦2023年5月5日は、旧暦だと3月16日。もし旧暦での実施なら5月5日は新暦6月22日で、旧暦なら府中界隈では田植えシーズン。江戸時代には翌6日に神社主催で御田植祭も行われていました（現在は新

5月5日新暦旧暦対応表

西暦	新暦5月5日に 対応する旧暦	月の入 り時刻	旧暦5月5日に 対応する新暦	月の入 り時刻
1900年	4月7日	23:54	6月1日	21:50
2021年	3月24日	12:17	6月14日	22:09
2022年	4月5日	18:31	6月3日	22:13
2023年	3月16日	翌4:16	6月22日	22:11
2024年	3月27日	15:12	6月10日	22:23

暦6月に実施)。

暗やみを舞台とするなら、できれば明るい月夜ではないほうが望ましいのではないかと思います。調べてみました。すると、2023年新暦5月5日の月の出は18:07、月の入りは翌朝4:16でした。晴れていれば神輿渡御中は月が見えている計算で、実際当日の空は少々明るい印象でした。

近年の月の入り時刻をまとめてみると、2022年は22:44、2021年は12:17と、ばらつきがあります。しかし、江戸時代のように月の動きを基準につくられた旧暦では、このようなばらつきはほぼありません。旧暦5月5日の月の入りの時刻は、ほぼ21:30～22:30の間です。

1864年(元治元)につくられた「武蔵総社年中行事」という、大國魂神社(当時は六所宮)の記録には、旧暦5月5日の亥の刻(21:00～23:00の2時間)に明かりを消し、渡御を行うとあります。御旅所到着予定は子の刻(23:00～1:00)。偶然か計算されたものなのか分かりませんが、この日は亥の刻中、必ず月の入りを迎えました。つまり、月夜の明るさを気にすることなく、暗い環境で渡御できることが確約されていたのです。なお、仮に月の入り前であっても、さほど明るくない、月齢4日前後の細い月です。

▼ いまもなるべく暗い環境で…

2023年5月5日の日没時間は18:31。8基ある神輿のうち4基までが、夕方の暗くならないうちに渡御をしはじめ、残りは暗くなってからの出発でした。とはいえ現在では街灯が消されることもなく、夜とはいえ明るい中で行われるくらやみ祭の姿を見ることとなります。

それでは現在の「くらやみ祭」という名は体を表していないのでしょうか？ いいえ、現在でも



2023年5月5日19:00頃の大國魂神社拝殿前は、暗やみの中、警備を担当するボーイスカウト団員の持つ提灯のみが明るかった。神輿が境内を出た19:30頃照明がつき開門、拝殿も参拝者を受け入れた。

あえて暗い時間帯の暗い環境で行われている神事があります。

神輿渡御が行われる直前には「御霊遷の儀」が行われ、大國魂神社の本殿にまつられている祭神の御霊が8基の神輿に遷されます。神事の途中で、神輿を見渡せる拝殿の扉が閉められ、明かりも消されます。このときには、参道から拝殿に通じる随神門、中雀門という二つの門も閉じられています。そのため一般の参拝者は、この神事を見ることはできません。準備が整ったところで号砲(花火)を合図に、神輿渡御がはじまります。中雀門内の明かりは、提灯が数個点灯している以外消されています。神輿が出発する本殿周辺では、その提灯もない暗い環境です。ロウソクの灯ったたくさんの提灯で神輿が警固されるのは、中雀門を出てからです。そして、再び門の内側が点灯し、開門して一般の参拝が可能になるのは、神輿が境内を出た頃からです。

新暦で行事が行われることになり、神輿渡御に際して必ず月は沈む、という法則は成り立たなくなりました。しかし、全てを暗い環境にするのは難しくとも、祭の一部をなるべく暗くして行うという意識は残されています。周辺の街灯によって明るく感じてしまいましたが、21:00頃、神輿が到着した御旅所内で行われる神事も、暗い環境で行われます。徐々に明るくなっていくとはいえ、翌5月6日の神輿還御(おかえり)が陽の昇らない早朝4時から始まるのも、その名残といえるかもしれません。つまり現在も暗やみで行くくらやみ祭は健在といえるでしょう。

展示会案内

出張展

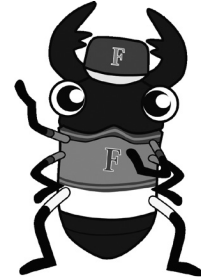
昆虫 魅 ようぜ!

野外観察への誘い

会期：開催中～12/10（日）

会場：ミッテン府中9F
イベントスペース

昆虫展が出張中だよ。
会場は府中駅前だから、
大勢の人に楽しんで
もらいたいな。



猛暑に見舞われた夏も終わり、季節は秋へと移りつつありますが、近年の温暖化に起因する気候不順はこの夏も昆虫たちの生活に微妙な影響を及ぼしました。セミの初鳴きや、バッタ・カマキリの羽化が幾分早かったり、雨のなかった7月に蚊の発生が少なかったり、相変わらず南のチョウが東京で繁殖したりと、毎年のように変化する事象には戸惑うばかりです。

変化と言えば、夏休みの風景でも、昔と比べて捕虫網を振り回しながらセミやカブトムシを追いかける子どもの姿をあまり見かけなくなりました。趣味嗜好の選択肢が多様な現在、昆虫に対して興味を抱く機会が少ないのかも知れません。博物館としては、身近な自然を伝えるべく、観察会をはじめ様々な普及活動を続けてきました。今一度、あしもとの自然に目を向けるきっかけとして、色々な場所にいる昆虫を知ってもらいたいと思います。



観ようぜ!

浅間山の雑木林や多摩川の河原といった緑多き環境を持つ府中には、豊富な種類の昆虫が生息します。普段は何気なく見ている昆虫たちの姿や色をじっくりと観ながら、その魅力を感じてもらえたらと、府中駅前の商業施設を借りて展示会を行っています。

昆虫を観察するなら、まずは家の周りから。庭木や生け垣、街路樹、近くの公園と、市街地の至る所に現れます。特にアゲハチョウの仲間は目に付きやすく、黄色や青の翅で舞う姿が目立ちます。

市街地に食草となる草木が多く植えられていることで、繁殖に事欠かないのが理由です。

でも昆虫を本格的に観察するなら、やはり雑木林や河原でしょう。昆虫が活動するために都合の良いエリアが整っているからです。特に夏の雑木林では、樹液に集まるコガネムシなどの甲虫類が見所になっています。夏が過ぎ、雑木林での観察には少々遅くなりましたが、今回は来年の夏に向けての予習になるよう、各種標本をじっくり観てもらえたらと思います。

むしろこれからの季節は、秋の河原に集う昆虫たちに注目です。展示標本をよく観たら、早速多摩川に赴いてみませんか。草原に隠れるバッタやコオロギを探しながら、時には捕まえて観察するのもいいでしょう。野外での行動を観察することも大切ですが、まずはその姿や形を理解するため、実物を手に取って観察するのも醍醐味です。また、河原に飛び交うタテハチョウやトンボの仲間も追ってみましょう。

昆虫は翅を持ち自由に移動します。雑木林や河原の昆虫、あるいは市街地の昆虫も、お互いの活動域を行き来するので、どの場所にも現れます。そんな身近ないきもの代表を本展で観て知って、考えるようになるまで、十分昆虫に魅了されることを願っています。

（中村武史）

捕ろうぜ!



② 黒曜石がやってきたみち

博物館にいと黒曜石の人気ぶりを感ずることがあります。かくいう筆者も、断面に不思議な光沢をまとった黒い石を幼い時に駐ち車場でみつけ、夢中で探しました。当時それを黒曜石だと思つたからです。大学生になり、「残念だけどそれはきっと黒曜石ではないね」と考古学の先生から教えてもらいました（溶解スラグという人工物でした）。そう、黒曜石が都内の駐ち車場にゴロゴロと散らばっているわけなどないのです…。

日本列島では、旧石器時代から黒曜石が道具の材料として使われました。ほどよい硬さを持ち、鋭い刃をつくり出せる点が好まれたようです。そもそも黒曜石は、火山から噴出したマグマが冷え固まってできた天然ガラスです。つまり、産出地は火山地帯であり、どこでも採れるわけではありません。

府中市の遺跡でも黒曜石製の道具などがみつかっています。そしてその一部は、どこで採れた黒曜石か（産出地）が判明しています。これは、黒曜石に含まれる元素の測定分析による成果です。たとえば、武蔵台遺跡でみつかった、およそ35,000年前（旧石器時代）の黒曜石たち。主体は、和田峠・鷹山系とよばれる今の長野県で採れたものとわかっています（中央写真の石器はその一例）。さらに、海を渡った恩馳島系（神津島／東京都）の黒曜石も1点含まれています。

また、縄文時代の集落跡である本宿町遺跡でみつかった黒曜石も分析がおこなわれています。旧石器時代にくらべて恩馳島系の黒曜石が占める割合が増え、西霧ヶ峰系（長野県）の黒曜石がそれに続きます。

これらの黒曜石はどのように運ばれたのでしょうか。まず、恩馳島系の黒曜石は、航海によって運ばれたと考えるのが自然でしょう。ただし、旧石器時代にさかのぼって舟をつくっていた

確かな証拠はみつかっています。航海ルートや移動手段については検討が進められているところです。

縄文時代の中ごろになると、長野県で採れた黒曜石は、フォッサマグナの谷を利用した道（下図の---）をつたって多摩地域などへ運ばれたと考えられています。この道は、日本海側の限られた地域でしか採れないヒスイ（宝石）が運ばれたルートを兼ねていたといわれています。



黒曜石を使った石器（長さおよそ7cm）

遠くで採れた黒曜石。産出地近くの人々が持ってきたのか、産出地外の人々が現地に出向いて持ち帰ってきたのか、さまざまなパターンが想定できます。いずれにしても、限られた手段での移動は、厳しさを伴ったことでしょう。当時の人は、それでも黒曜石製の道具を利用したかったのだと考えられます。

各地の遺跡からみつかる黒曜石の産出地については、膨大な分析結果が蓄積されています。これにより、旧石器時代や縄文時代に黒曜石を携えた人が通った道、漕いだであろう路の存在が浮かび上がってきました。産出地を知ることができる黒曜石は、はるか昔の人が開拓したみちを復元するために欠かせないのです。（石澤茉莉子）



府中市内で見つかっている黒曜石の産出地

